

まんだら通信

第201号(通巻237号)

平成25年03月 西暦2013年 佛暦2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084

真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉

郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺

TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040

<http://www.shiunji.org/>

Mail post@shiunji.org

ゆとり

七十歳過ぎの人は憶えていると思いがすが、大東亜戦争が終わってすぐの頃は、食べ物不足して親たちは閉口しました。今では想像出来ないことですが、東京でさえ国会議事堂の前や新宿御苑など、空き地という空き地は、カボチャやサツマイモの畑だったそうですから。

作物は強制的に供出しましたから、農家であつても、食べ物不足は例外ではありませんでした。

その頃、川下の港の周りに簡単な小屋掛けをして、大勢のひとが塩を作りました。『豆製塩』といったように憶えています。勿論、塩は酒と同じように専売品です。

ら、個人が作るのは違法ですが、物不足の時代ということで、役所は大目に見ていたのでしょね。

学校帰りには回り道をして、海水を汲んだり薪を燃やしたりして、日暮れまで手伝いました。私を育ててくれた家の兄さんは満州の軍隊でしたが、運良く抑留もされずに早く復員して、この『豆製塩』をしました。

出来た塩は、新潟の軍隊時代の戦友の農家に運んで、あちらの米と交換してきました。勿論『ヤミ』ですから、途中で手入れがあれば没収ですが、あのお人好しの上なしの兄さんでさえ、背に腹は代えられなかつた時代ということですね。

勿論 本来の農家の仕事をおろそかに出来るわけはありません。どこの家も家畜はいませんから、田起こしから代掻きに畑の荒起し。米麦やサツマイモの収穫はすべて人間の腕と背中でした。

そんな時でも、春秋の彼岸やお盆の念仏に『疱瘡ごもり』、『おびしゃ』、『いせつこり』(伊勢講)に『十夜』…お金に関係ない行事もこなしてましたね。

六年に一度の『たのくろ巡礼』の前など、しゅうとめ達は夜になると集まって『真室川音頭』など、当時流行りの歌のおさらいなどしてました。つまりこの当時は、まだ気持ちにゆとりがありました。

その後、昭和三十五年の東京オリンピック、東海道新幹線開通から昭和四十五年の大阪万博まで、日本はずつと右肩上がりの経済成長を続け、世界第二位の経済大国とまで言われるようになった。

やがて、門松は自然保護のためにならないという見当違いの理屈で、大方の家が配られた紙を門口に貼るようになりました。

念仏講が解散し、お籠りもなくなりました。みんなが顔を合わせる機会がなくなれば、向こう三軒両隣は兎も角、集落の繋がりがバラバラになって行きます。

私とて、縄文時代から続く日本人の良い気性が急にダメになるとは思いませんし、先頃の東日本大震災で見せた日本人の思いやりの心を見れば、まだ捨てたもんじやないとは思いますが。

幕末から明治、そして昭和になってからも、来日した外国人は口をそろえて「貧しそだが、心の優しい朗らかな人達の何と多いことか」と誉めちぎりました。今は「貧しそだが」とは言いませんが、「もう一度来たい国」の筆頭だそうですね。

「良い国」という評価は多分間違いではないのですが、八十年近くこの国に住み続けて思うのは「それにしても、昔の方が住みよかつたなあ」という思いです。一つには、常識知らずで自分勝手な人が増えたことでしょうか。

役所の窓口に来たひとが「道ばたにムジナの死骸があるが、役所は片づけないのか」と、非難めいた顔で言いました。こんなこと、見つけた人が片づければ済むことです。

子どもを学校に送る途中、セブンイレブンを車を停めて、ゴミだけ捨てて行く親もいる始末です。

今日の産経新聞に、ジャーナリストの細川珠生さんが「本気でイジメをなくすには、親への道徳教育を必須科目にして、幼稚園から小学校卒業まで、毎月二時間の講義を受け、感想文を提出させること。欠席したり感想文の提出がなければ、子どもの評価に影響するということにすればよい」と更に「このことで親に向学心が芽生えれば、その親の人生が豊かになる筈」と言っています。ここまでやらないといけないうのかも知れません。



▼人さまにはゆとりなどと言いながら、海辺に行ったのは久しぶりです。暖かいけれど強い南風の中、ハマダイコンが健気に咲きはじめていました。

言い訳めいて恐縮ですが、画面が小さく雰囲気は伝わりません。春先の浜辺は、何と云ってもこの花が主役です。

川下港近くの群落はまだ咲いていないようですが、やがてむせ返るほどに見事になることでしょう。▼17日(日曜日)は知事選挙です。どうぞお忘れなく。

2013/03/09 龍渉

▼3月11日は東日本大震災が起きた日です。午後2時46分には全国のお寺で、犠牲になった人の御霊を慰め、一日も早い復興を祈念して梵鐘をつきます。鐘の音が聞こえたら、どうぞ手を合わせて下さい。

▼弥生。穏やかないい言葉ですね。数日の暖かさで、新しい農道の川津桜の並木が満開になりました。日脚も伸びました。「ああ、また一年生かしてもらった」という実感が湧く季節です。

▼以前は誰かが亡くなると、夜明けを待ってお寺に知らせにま

た。近い親戚二人で「告げに行く」といいましたね。近ごろでは電話で済ませてしまうことがありますが、お葬式と言う儀式は、もう始まっているのですから、仕来り通りが良いと思います。また、お葬式が終り忌中払いも済んでから「寺参り」(寺送りとも)をしますね。東京や埼玉、横浜や栃木など遠方は仕方ないことですが、地域内なら濃い親戚の何人が奇数の人で、菩提寺の本尊さまにお参りしましょう。お布施はこの時に差し上げる方が丁寧だと思います。

余滴

第八十六話 帰宅

いま、この雑誌をお読みの方で、お父上やお母上の介護をされている方はたくさんいらつしやるのではないかと存じます。

私も昨年、九十一歳になる母親を亡くしましたが、最後の数年は介護で大変でした。

母が、病院で細くなった両手を胸の前で合わせて「家に帰しておくれ」と言った時は、本当に困りましたねえ。結局、「あとでお医者さんに頼んでみるね」と言いましたが、そのまま病室で二日後に亡くなりました。いまでも、あの時の母の細かい声が耳に残っています。

「誰でも通る道ですよ」と介護が終わった方から言われますけれど、こればかりは経験した人でないとわかりませんねえ。「これが介護か、見おさめか」。いままなつては、介護がいかに大変かということとを体験させてくれた母に感謝しています。

今日は、私が親しくしていただいている看護師さんからうかがったいい話を紹介しましょう。

看護師さんは、千葉の病院にお勤めの岡澤ひとみさん。十代の頃、アイドルに憧れたというだけあって、いまでも瞳がキラキラ輝くかわいらしい看護師さんです。

ある日のこと。ひとみさんが担当している胃がんで長期入院されていた男性の患者さんは、残された時間もかぎりなく少なくなっていました。

末期のがんだったのですね。血圧も次第に下がり、いよいよよという

話が主治医の口から出た時、患者さんの息子さんが主治医に「父を家に帰してあげたいのですが……」と言いました。聞けば、数日前から、患者さんは口元に耳を傾けなければ聞き取れないような小さな声で、「家に帰りたい」としきりにおつしやっていたようなのです。

もちろんそれが無理なことは息子さんも奥さんもわかっています。しかし、お別れが近づいたと知って、何とかお父さんの希望を叶えてあげたかったのでしょうか。

本人に確認しようにも、意識はほとんどありません。この希望に、主治医はもろろん、ひとみさんも迷いました。

希望は叶えてあげたい。でも、患者さんのご自宅は神奈川県鎌倉です。入院している千葉の病院から移動中に亡くなる可能性も大です。それに、いまからすぐにご自宅に運ぶにしても、自宅には寝かせるベッドすら用意されていませんし、その態勢を準備する時間すらないので、迷うのは当然のことです。

ひとみさんもどうしていいか、わかりません。しかし、家に帰すなら、今しかありません。どんな容態は悪化しているのですから。主治医は決断しました。「何か途中で起こつても、一切、文句は言いません。どうしても、お父さんを家のふとんに寝かせてあげたいのです」という、奥さんの意見が通ったのです。

そして、翌朝、看護師のひとみさんがついて、患者さんは帰宅することになりました。ひとみさんは心配でなりません。なぜなら、患者さんの血圧は触診で、やつとわかるくらい低下してしまいましたし、呼吸も不規則になっていたので、足の指先は、すでに冷たくなり始めていました。

主治医の指示は、厳しいものでした。「いいか、途中で何かあっても、君が判断しろ。すべて、君に一任する。最悪、困ったら、病院にすぐ引き返しなさい」お父さんは息子さんのワゴン車の後部座席に、手術用の大きな酸素ボンベ、血圧の維持のための点滴が用意され、奥さんは助手席に、ひとみさんは患者さんといっしょに乗り込みました。ひとみさんと奥さんは不安と戦いながら、まったく腰を下ろすことなく、立て膝のまま、ずっと患者さんから目を離すことかありませんでした。

幸いなことに容態の急変はありません。「がんばって、もうすぐですからね!」。ひとみさんは、まるで家族のように、患者さんを励まし続けました。一時間も走つたでしようか。突然、奥さんが後ろの座席を振り返って、声をあげました。「あなた、海が見えてきましたよ!」。ひとみさんも、窓の外をはじめて見ました。すると、海がキラキラ光っています。

ひとみさんはその時、患者さんの目に涙が浮かんだことに気づきました。そして、狭い車内でお父さんに海が見えるように抱きかかえてあげたのです。すると、目にたまっていた涙が一筋、頬を流れていきました。

ふるさとの光る海が、末期がんに侵されたお父さんを迎えてくれたのです。お父さんは、ついに、希望のわが家に辿りついたのです。

そして、朝早く敷いておいたふかふかの布団に、お父さんは横になりました。するとどうでしょう。それまでまったくと言つていいほど意識のなかつたお父さんが目をぱちりと開けて、あたりを見まわしはじめたのです。

「お父さん! わかる? 家に帰ってきたんだよ」「よかつたね」という家族の声に何度もうなずいたかと思うと、涙が一筋、青ざめた頬を流れていきました。そして、間もなく、昏睡状態に入りましたその晩、奥さんは意識のないお父さんにそつと声をかけました。「あなた、やつといっしょに寝られるわね」

そう言つて、ご主人の布団に入り、添い寝をされると、お父さんの冷たい頬に唇を寄せました。そして、奥さんは本当に幸せそうな顔で、その頬に自分の頬を重ね、やさしく右に左に動かししました。

ひとみさんは、冷たくなつてきたお父さんの身体を少しでも温めてあげようと、湯たんぽを足のほうに入れ、冷めたら、またお湯を入れ替えてあげました。

こうして、お父さんは、翌朝、家族に見守られて旅立たれていきました。その時のお顔は微笑んでいたようだと、ひとみさんは思ったそうです。

今月も鳳豊師匠とMOKU出版のご好意で、人情小噺を転載致しました。いつもながら、実話に基づいた心にしみるお話しをご堪能下さい。

『あそか基金』と『まんだら通信』へのお志

- 白浜・加藤和子様
- 富津・大網昇様 埼玉・平島眞視様
- 鴨川・佐藤恵重様 千倉・黒川陽子様
- 佐原・惣持院様 白浜・落合誠様

その他、匿名も含めて多くの皆さまから切手やお電話、手紙や葉書のご感想を戴きました。

押し売りのようにお送りしているので、どうも心苦しい限りなのですが、お志は『あそか基金』も含めて、有難く使わせていただきます。